

〔巻頭言〕

紀要第15巻第1号の発刊に寄せて —看護実践研究論文の可能性と意義—

学長 黒江 ゆり子

本学は、看護学における高等教育機関として岐阜県の看護の質の向上に寄与するという明確な使命のもとに平成12年に開学し、平成16年に大学院看護学研究科修士課程（現在の博士前期課程）、平成18年に博士後期課程を開設した。さらに、平成20年には専門看護師コースを併設し、看護学科および看護学研究科ともに、看護実践を基盤とした教育研究活動を続け、今日に至っている。

当該紀要は、今年度で第15巻を迎え、看護学教育研究に関する貴重な論文が豊かに報告された一冊となっていることは大変大きな意義をもつとともに、これまでの紀要の発刊はいずれも、多大な時間と努力によるものであることを考えると感慨深い。また平成19年の第8巻において「時間をかけて書いたものが伝えられること」をテーマに巻頭言を書かせていただいたのが、もう7年前であることに時間の流れの速さを感じるものである。

さて、先に述べた看護実践を基盤とした教育研究活動と地域貢献についてであるが、本学は、その取組みの一貫として、看護実践研究の手法の開発と推進を開学以来続けてきた。看護実践研究は実践現場における研究活動であり、看護実践の改善・改革を目指して行われる研究手法を意味する。それは、WBR（Work Based Research）における“Insider Researcher”の考え方（Costley, 2010）と同様の基盤に立つものでもある。

看護実践研究においては、看護実践に関する現状分析を行うことにより看護実践上の課題を明確にすることから出発する。課題が明確化されると、その課題を解決するための方策を考案・創生する。課題解決に向けた方策の実施、結果の的確な把握・評価によって、考案した方策に一層の改善を加えることが可能になる。これらを通じた課題解決により、看護実践の質の向上が現実のものとなる。いずれの時点においても重要なのは、利用者の視点に立つことであり、保健医療福祉の利用者が何を求めているか、そのニーズに対応するために看護職者としてどのような実践が可能であるか、その実践は利用者

にとってどのような意義があったかなどを考え続ける。

実際にこのプロセスをすすめるには、現状分析に約1年、明確化された課題を解決する方策を企画し、協働する看護職者と共有し、実施し、さらに方策を工夫することに約1年、成果を確認し、看護のあり方を考察することに約1年を要することにより、3年以上のプロジェクトとなることが多い。このように取り組まれた看護実践研究は、その詳細を報告することに重要な価値があるが、膨大なデータと分析を包摂することから、制限された紙面での報告には困難を伴うことが多い。看護実践研究の全貌をその目指すべきところを明確に示しながら報告することは今後の工夫が必要となっている。

看護学は実践活動を基盤に成り立つ学問である。看護学はさまざまに構築された諸理論を通して、人間、そして人間が在る環境をどのようにとらえようとしているか、どのような健康を目指そうとしているか、それらを踏まえてどのような看護のあり方が可能なのかを考え続けている。人間のとらえ方にしても、人間の在る環境にしても、目指している健康についても、社会が移りゆくことで多様に変化する。看護学研究は1970年代の事例研究法から量的研究法、質的研究法、および混合研究法（mixed methods）など多様な発展をみた。今日の私たちは多彩なデザインで研究に取り組むことが可能になっている。だからこそ、看護実践を豊かに著わすことができ、看護学の知と技を次世代に伝えることのできる研究法の探究を続けることが重要となる。

本学はこのような看護学研究の手法を今後も探求していくものであり、紀要において、意義深い看護実践を的確に報告できる新たな工夫への挑戦に大きな期待を寄せたいと思う。

文献

Costley, C., Elliott, C., Gibbs, P. (2010). Doing Work Based Research (pp. 1-7). Sage.